

大相撲九州場所鑑賞の記
時代の分岐点か 危機到来か

<1> 白鵬 40 回目の優勝 しかし

怪我人だらけ、休場続出のこの場所、白鵬が優勝するであろうことは素人の目にも想像できた。白鵬が存在しているだけで、様々な前人未踏の記録が歩き続けていく昨今、いまさら驚くこともないのかもしれないが、40 回も優勝してさらに上積みが続くということは恐るべきことと表現してもおかしくない。立ち合いの一步目と二歩目の踏み込み、それにより深く沈み込んだ腰の位置、鋭い眼光と素早い手の動き、幕内力士の中でこれに近い腰の構えができているのは遠藤ぐらいだろうか。ただ一つ黒星が付いた嘉風戦、勝負がついた後で「立ち合い不成立」を主張したが、これはまずかった。ビデオで再確認するまでもなく、両力士とも土俵に手をつけており、十分に立ち合いは成立していた。ルール上、土俵上の力士から物言いはつけることができない筈なので、何故この行動に出たのかが解せない。「40 回目の優勝を全勝で飾りたい」との心が、このような本能的な行為に繋がったのではないだろうか。この勝負は、嘉風が苦心の結果編み出した「横綱に勝つ為の立ち合い」が凱歌を上げたということに尽きる。千秋楽の優勝者インタビューで、日馬富士暴力事件について観客席に向けて謝罪の挨拶をしたところまでは「さすが白鵬」との評価だったが、日馬富士も貴ノ岩も土俵に復帰できるかのようなメッセージを発したのは少々勇み足だったような気がする。おまけに万歳三唱までやってしまうと、ちょっと座興が過ぎる感じがしてしまう。折角の荣誉有る戦績を汚すような場面が付いてしまった。

<2> 次の時代が見えてきた

一人だけになった横綱の独走を許した大関も、二人で 17 勝しか上げられず、千秋楽には一人だけになってしまった。政治の世界同様に、一強独走態勢は望ましくない結果を数多くもたらすことになる。結局独走する横綱に追走する形になったのは隠岐の海と北勝富士の八角部屋コンビだが、逆転するほどの力は持ち合わせておらず、千秋楽前に賜杯の行方を決することになった。隠岐の海の相撲にはさほど期待すべき要素はなく、勝ち星に必然性はあまり感じられなかったが、北勝富士の相撲には気合いも迫力もあり、執拗に頭を下げて前進し続け、対戦相手を威圧する内容があった。よく考えられた戦法が矢継ぎ早に打ち出され、攻撃されても反撃に転じられる相撲は、豊富な稽古量の賜物。西前頭 3 枚目で 11 勝 4 敗は見事。貴景勝の低い位置から突き上げるような突き押し相撲、前進を始めると停まることがない攻め、相手が苦慮の末叩きにでればすかさず攻めて行く。基本に忠実な押し相撲は今後の伸び代の大きさを感じさせた。西前頭筆頭で 11 勝 4 敗は、「上位の壁を打ち破る」場所になったようだ。小結に昇進した阿武咲は、貴景勝同様に低い位置から伸び上がるように突き押しを繰り出す。厳しいおっつけも加わって相手を土俵際に追い込んでいく。逃げたり叩いたりしないので威力は抜群。今場所は少々相撲を覚えられたせいか、上位戦で星が上がらなかったが、千秋楽に勝ち越しを決めることができた。関脇の地位に定着した御嶽海は、足の故障も災いして中盤で足踏みが続いたが、終って見れば 9 勝 6 敗。小結を二場所・関脇を三場所守り、存在感を増してきた。おそらくこの四力士が次の世代の中心となるであろうことが明瞭に感じられた場所だった。

<3> 活躍したのは若手ばかりじゃない

若手力士の台頭著しき中、関脇を四場所勤めた後東前頭筆頭に下がった玉鷲は、力強く伸びる腕と腰で移動する体で相手を土俵際まで一気に運ぶ力強さで 11 勝 4 敗。この一年間で急成長を遂げたが、場所中に 33 才の誕生日を迎えたベテラン。大器晩成か、この先まだまだ進化と持続が続くそうなので、目が離せない存在になってきた。

何と言っても注目すべきは安美錦の幕内復帰の場所。西前頭 13 枚目という位置は、6 勝 9 敗以下の出来栄であれば十両に再陥落する可能性がある。5 日目まで負けなしで中日を 6 勝 2 敗で通過、もしかしたら・・・

といらぬ期待をしてしまうような出来栄え。相手の相撲のスタイルを熟知した上で、繰り出すタイミングの良い技の切れ味は見事だったが、中盤から疲れが見えた感じで、千秋楽にようやく勝ち越すことができた。NHK の取材インタビュー番組の中で「大活躍の若手力士の父親と同じ年齢だ」と笑っていたのが印象的だった。10月に39才になったばかりだが、40才まで相撲が取れる可能性も見えてきた。往年の名大関名寄岩の後を追って「涙の敢闘賞」。

けがからの復帰という点では、幕下東13枚目の豊ノ島が5勝2敗の好成績を上げたのも朗報のひとつである。安美錦と同時期に足の大けがで幕下まで陥落したが、復活の兆しが見えてきた。幕内の取り組みに欠かすことが出来ない名脇役がもう一人頑張っているのは嬉しい知らせである。

一方、まだ若手グループに含まれると思うが、遠藤の相撲がかなり蘇ってきた。低く安定した腰の位置、低く保った姿勢で前みつを取り前進し、土俵際では深く腰を割って差し手を返して相手を俵の外に出す。まさに教科書通りの絵になるような相撲を沢山見せてくれた。膝や足首の故障で長く低迷していたが、ようやく遠藤らしさが帰ってきた。来場所以降が楽しみだ。

<4> 迫り来る危機

貴ノ岩の突然の休場がアナウンスされた後、不祥事が発覚した。

当事者である日馬富士からの申告の後で日馬富士は休場。休場理由は「けがによる」とされているが、協会ぐるみの仮病（けがを偽装）と考えられる。暴力沙汰の内容の真偽については専門の組織や担当者が調査して明らかになるはずなので、ここで中身についてコメントすることは控えたい。

事件の内容が様々に報じられていて信用できる情報がない。白鵬が場所中及び千秋楽に発したメッセージや一部の人が調査に非協力的であることも合わせて考えると、事実以外の「もうひとつの何か」がうごめいていると思わざるを得ない。

憶測による記述は危険なので、本件についてはここまでとしておく。

事件後の処置としての現横綱の処遇、現在休場が続いている横綱の処遇、独り立ち出来ない大関の存在などなど周りの状況も重ね合わせて見ると、只ならぬ危機が迫っているような気がした。

以上